



シアターH 拡大版

『激動の昭和史 軍閥』

HuRPの定例会議でDVD鑑賞会を開きました。「シアターH」と題して、これまでも人権や平和をテーマにした映画を紹介していますが、今回は映画『軍閥』鑑賞会に参加した3人の感想を紹介し、戦争と平和について考えたいと思います。

映画『激動の昭和史 軍閥』鑑賞雑感

国家権力とマスメディア、延いてはそれらを支持する国民に対して、常に自制心と自省の念を持って国政に関わらなければならないという警鐘を鳴らす作品、それが映画『激動の昭和史 軍閥』です。終戦から70年もの時が過ぎようとしている今だからこそ、この映画の価値は再評価されるべきであるといえるでしょう。

対米英開戦時の内閣総理大臣である東条英機は、戦局が進むと複数の大臣を兼任し、陸軍大臣と参謀総長までも兼任するという禁じ手を使って権力を一極化していきます。国家権力を恣にした東条は、自制心を失い、周囲の声に耳を傾けることなく、人権を蔑にした戦争を断続させます。自制とは自らの欲望や感情を抑制することですが、東条は自らの行動を省みるという意味の自省をすることもできなくなっていく。近衛文麿らが終戦工作を進める中、東条は自らの非を認めるところか天皇に徹底抗戦を上奏します。本作は、自省しない東条が天皇に徹底抗戦を上奏する滑稽な姿が描写された直後に原子爆弾投下の実映像が流れ、終

幕となります。暴走する権力の怖さを描いたこれ以上ないラストシーンといえるのではないのでしょうか。

この映画の中では、新井という新聞記者も自省することを求められます。新井は言論統制の中、戦局の実態を暴き東条から懲罰召集を受けます。いわゆる、「竹槍事件」です。徴兵された先で新井は、開戦のムードを煽り、日本が攻勢のときには東条を担ぎ上げていたマスメディアの責任を一人の特攻隊員に問われます。それに対して、新井は一言も返せないままその特攻隊員の出撃を見送り、本作はラストシーンへと向かいます。マスメディアを痛烈に批判する特攻隊員の言葉、それを受けて閉口する新井の姿は、「第四の権力」ともいわれるマスメディアの力とその危うさについて熟考することを強く訴えかけてきます。

来夏、日本は終戦から70年、本作公開から45年を迎えます。昨今では、戦争を題材とした映画やドラマの様相も少なからず変わってきたように思います。この映画は、最近の戦争をモチーフとした作品の多くから私が感じていた違和感を解消してくれました。戦時下の人々の感動的な人間ドラマにスポットを当てた作品は多いですが、戦争の実態は

一般国民を無視した権力の暴走です。本作で東条を演じた小林桂樹氏も語っているように、何が何だかわからないうちに始まって、気が付けば大勢の人々の血が流れて終わっていたというのが、おそらく終戦当時の一般国民が先の大戦に対して抱いていた実感だったのではないのでしょうか。日本国憲法下における主権者は、国民です。「よくわからないうちに戦争が始まった」ということは、今日の主権者たる国民にとっては許されないことです。安倍内閣が特定秘密保護法制定や集団的自衛権行使容認を強行している今、国民は主権者として自省し、国家権力が自制を失うことのないよう行動していかなければなりません。将来の映画俳優に「第二の東条」の役を演じさせるような事態を決して招いてはならないのです。(H.O.)



「激動の昭和史 軍閥」から戦争責任を考える

この作品は東条英機と新聞記者新井を中心に、天皇から国民まで様々な立場の者の思惑や心情を細かく描いており、二・二六事件から原爆投下まで、太平洋戦争の全体像を知ることができる非常に濃い内容の作品であった。

二・二六事件で台頭した陸軍は、ソ連の軍備増強や、イギリス・アメリカからの圧力に漠然とした恐怖を感じ、アジアに日本の支配力を確立して高度国防国家を作り上げようと満州事変を起こし、更に短期間で勝利できるとの見通しで支那事変を起こした。しかし支那事変は泥沼化。事態の打開と資源確保、英米に対する抑止効果を期待して快進撃を続けるドイツと手を組み、太平洋戦争へと突入してしまう。漠然とした恐怖から過度な国防政策を進め、目先の経済的利益や抑止効果を重視して強国と手を組むという考えは今の日本と共通するものを感じた。

天皇は短期で勝てるのであればと支那事変を承認し、外交重視の方針を示しつつも太平洋戦争も承認してしまう。海軍は陸軍との権力抗争から2年は負けないとの見込みで南下政策を進めてしまう。真珠湾攻撃が成功すれば、多くの国民は勝利に酔い「東条様、東条様」と熱狂した。国民の支持を得た東条は次第に周囲の反対意見を排除して暴走してしまう。

やはり、特攻隊員が新井に叫んだように、「勝てる戦争ならしても良い」という考えがこの戦争を起こしたのであり、全員が戦争の責任者なのだろう。他国で知らない人がどれだけ殺されようと何とも思わない。自分が安全で自分の暮らしが豊かになればそれで良いという考えが戦争を起こし独裁者を育ててしまったのだろう。

一度回り始めた歯車は止められなかったのか。この映画を見る限りそんなことはなかったように思う。海軍が意地を張らず、対英米戦が無謀であると主張すれば違っただろうし、天皇が好戦的な参謀総長や軍令部総長を排斥すればまた状況は違っていたと思う。天皇が帝国国策遂行要領を変更させ、対中政策の譲歩も視野に入れた外交をさせていれば太平洋戦争突入前の講和の途もあっただろう。国民が戦勝の報告に浮かれなければ開戦直後の講和もあったかもしれない。ミッドウェー海戦時から真実の報道がされていればこれほどの犠牲を出さずに敗戦を迎えられたのではないかとも思う。

私自身、戦後の日本で30年以上生きてきたにもかかわらず、陸軍と海軍の力関係や、天皇や統帥部の権限など全然知らず、戦争の総括ができていなかったことを痛感した。毎日新聞の記者が命懸けで戦況の真実を伝えた「竹槍事件」もこの映画を通じて初めて知った。モデルとなった新名丈夫は、南方における防衛戦の窮状から海軍の航空力を増強すべきだと説いたため、海軍航空力増強を渴望する海軍当局から歓迎されたということのようだが、真実が伝えられず、蔑ろにされていると感じていた海

死刑囚絵画展 2005～2014年 一大道寺幸子基金の10年 2014年9月14日～23日 於：ギャラリー大和田（東京・渋谷） ～展覧会に足を運んだ2人のレポートをお届けします～

■死刑囚絵画展■

2014年9月16日、東京・渋谷のギャラリー大和田で開催された死刑囚絵画展に行った。自分自身が死刑廃止の賛否を決めきれないことへの判断材料になるようなものがないか、絵で表現した死刑囚の意識がわかるものがあるのではないかと、という問題意識をもって観た。

作品群は、事前に告知チラシで、一部掲載されている以上に優れたものだったと思った。芸術性については、評価できる鑑賞力はないが、表現力・テクニックはすごいと思う作品も多く、拘置所に入る前に絵画を学んでいたのではないかとと思われるものも多い。しかし、前職が生計を立てられる画家であった人はいないのではないかとと思う。

作品にいくつかの傾向があるように思った。心の平穏を取り戻している人、仏などに救いを求める人（般若心経が多くあった）、司法・社会や何かに対する怒りを表している人、外への願望。動植物の絵。幾何学的抽象画。

私が期待していた被害者やその遺族（冤罪でなければ）への思いは、感じられなかった。私が気が付かなかったのであればいいのだが、どこか自分中心であるような気がする。毎日、死の恐怖に晒されている人に問うのは酷かもしれない。死の恐怖や苦しみの中、死んでいった被害者や取り残された遺族が観たらどう思うか。（T.S.）

■生きて償うこと■

昨年も訪れた「死刑囚絵画展」。初日のためか、10年の集大成の展覧会に注目が集まったのか、多くの来場者で会場は混み合っていた。展示数は約350点。その中には、すでに死刑を執行された元死刑囚の作品も展示されている。

どんな理由で罪を犯してしまった人なのか。冤罪を訴える人は、どんな想いでこの絵を描いたのか。作品を観てまわるうちに、獄中では画材が限られているのだろうと予想がつく。色鉛筆、ボールペン、筆ペンなどだろうか。油彩や水彩絵具は使われていないようだ。プロも顔負けの腕前と思われる作品の前で見入っていると、鶴見事件（※）で冤罪を訴える高橋和利さんの支援者だという方が話しかけてきた。高橋さんは獄中で約25年を過ごし80歳を超えるという。『「鶴見事件」抹殺された真実—私は冤罪で死刑判決を受けた』（2011年／インパクト出版会）を出版しており、現在も再審請求中だ。

「疑わしきは罰せず」という刑事裁判の原則が守られ、冤罪事件がなくなることを願うが、冤罪のみに焦点をあてた死刑廃止論ではなく、罪を犯した者に面会し、励まし、「生きて償う」ことを共に模索しながら死刑廃止を訴え続けた、故大道寺幸子さんに強く共感する。

なお、応募作品の展示と選考委員によるシンポジウムと、10年間という期間を決めて設立された大道寺幸子基金の今後について発表を行う企画が、10月11日「響かせあおう死刑廃止の声2014」と題して開催される（四谷区民ホール）。（M.A.）

※鶴見事件：1988年、横浜市鶴見区で金融業者夫婦が殺され1200万円が奪われた事件。逮捕された高橋和利さんは金を持ち去ったことは認めたものの、現場を訪れたとき被害者はすでに死んでいたとして殺人を否認。しかし金を持ち去った弱みに加えて、取り調べの際、刑事による暴行を受け自白を強要され、ついに殺人を認めるに至ったという。